

科学を担う他者たち：清末科学小説における親縁と鏡像の表象分析

Others Who Bear Science: An Analysis of Kinship and
Mirror Representations in Late Qing Science Fiction

武 小 萱

WU XIAOXUAN

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要

第60号 2025年12月 拠刷

Journal of Humanities and Social Sciences

Okayama University Vol.60 2025

科学を担う他者たち：清末科学小説における親縁と鏡像の表象分析

武 小 萱*

はじめに

『野叟曝言』は清朝夏敬渠により記した全20巻154回の長編小説である。成立時期は乾隆帝時期（1736-1796）とされている。その最終回「泄真机六世同夢 絶邪念万載常清」において、

「隱隱として文氏に施有り、また一素臣なり。祔郎また一文龍なり。後局を開括するも、尽く文字なき処に在り。然らば、この書をして未だ畢らざると謂うも、また百数十回を續くも宜し。

（隱隱見文氏之有施，亦一素臣也；祔郎又一文龍也。開括後局，尽在無文字之処。然則謂此書未畢，亦続百数十回也宜。）

と綴って、これに続く物語の存在を予言している。『野叟曝言』の主人公文素臣は滅仏尊儒の大いなる業績でその栄誉が六代に行き渡り、子孫も多く残すことになったのだが、ここで継承者として示されたのが文施と文祔であることに注目したい。文施は龍の頭に載せられ、異域「波而都瓦爾」にまで連れ去られた。そこで夢の中で契りを交わした姫と邂逅を果たし、子である祔をなした。言い換えてみれば、文祔は中国人と異域人の間に生まれた混血（ハーフ）である。

この予言は、王朝末期の1909年に、一人の医著作家によって果たされた。陸士諤の『新野叟曝言』において、文祔が生産性の向上、科学の発展、地球外進出と移民の準備を通じ、全世界にわたる過庶（人口過剰）の問題解決に臨んでいた。中国人と異域人の血を混じて生まれた文祔は、このようにして身体的・文化的「越境性」を持つ人物となり、先鋭科学の発展、近代中国復興の未来、国家種族を問わず包摂する大同世界の実験場の建築などの担い手になった。

清末小説の物語構造において、このような越境性の持つ「新たな主語」の誕生は、従来の枠組みにとらわれない斬新かつ独自性の高い試みであるため注目に値する。ところが、管見の及ぶ限り『新野叟曝言』を取り上げ、とりわけ文祔の混血身分に着目した分析はまだ空白のままと言える。本稿では、この混血児・文祔の描写を手がかりに、清末科学小説における「混血」「異族」「他者」の表象のあり方を分析し、他者を通しての同時代の民族的主体性の再構築や未来模索の可能性を探る。

* 岡山大学社会文化科学研究科所属 博士後期課程

「欧産」と身体上の他者

陸士謗が踏まえた『野叟曝言』から文祿の出自をたどると、祖父の陽旦は「波而都瓦爾」の王であり、母もまたその王女として生まれている。「波而都瓦爾」はポルトガルに対するかつての漢字表記である。イタリア伝教師ジュリオ・アレーニが記した『職方外紀』（1623年）の巻二には、「波爾杜瓦爾」と表記した上、「最も西に位置する波爾杜瓦爾は五つの地方に分かれる。かつては自国の王がいたが、後継者が絶えたため、以西把尼亞（スペイン）の君主がその兄弟を討ち、暫定的に統治した」¹と紹介している。『野叟曝言』において文祿の父・文施の婿入り先を波而都瓦爾（以下、ポルトガルと表記する）に設定したのは、「後継者が絶えた」という印象から来た可能性も考えられる。

『新野叟曝言』で明確に文祿の混血身分について触れたのは十二回「裂地轟天英雄壯志 盃弓蛇影兒女痴」で、「祿兒之母係欧產（祿兒＝文祿の母は欧洲の生まれ）」と明言している。現代人の感覚からいと、「○○（地域）産」のような産地表示の表現は、流通の発達と商品経済の活性化を反映するもので、表記の対象は商品、すなわち「物」のほうが多い。歴史を振り返ってみても、環境によって果物の性質が変わるという戦国時代のことわざ「南橘北枳」から、地理環境が作物に与える影響に対しての当時の人々の認識がすでに確認される。海外の产品に関しては、明代の馬歡が鄭和の大航海に付き添い、旅の所見をまとめた見聞録『瀛涯勝覽』をめくると、ベトナムからサウジアラビアまでの特産品が紹介されるが、「産」の表現は使われていない。清末に入ると「欧洲」という呼称が定着し、雑誌新聞でも頻繁にみられるようになったが、所見の限り、『新野叟曝言』が創作された1909年までに「欧産」が明確な意味を持つ綴りとして使われた実例は確認されていない。『野叟曝言』でも使われておらず、『新野叟曝言』において初めて出現が確認される「欧産」は、陸士謗の造語である可能性が高い。

陸士謗は文祿の身分を定義するに際し、まずその母親の属性に着目した。「欧産」という新しいカテゴリーに位置付けられた母親の存在をもって、主人公の身体的立場の基盤を説明したのである。その背後に潜む認識構造上のメカニズムを解明するため、まず当時の清朝の人々の混血に対する認識原理を分析する必要がある。以下、清・趙翼が著した『簷曝雜記』巻四から、広東省で起こった黒人と白人の間に子供が生まれた様子の記載を引用する。

廣東為海外諸番所聚。有白番、黑番，粵人呼為「白鬼子」、「黑鬼子」。白者面微紅而眉髮皆白，雖少年亦皓如霜雪。黑者眉髮既黑，面亦黔，但比眉髮稍淺，如淡墨色耳。白為主，黑為奴，生而貴賤自判。黑奴性最慤，且有力，能入水取物，其主使之下海，雖蛟蛇弗避也。古所謂「摩

¹ 「其在最西者曰波尔杜瓦尔、分为五道。向有本王、后因乏嗣、以西把尼亞之君击其昆仲、乃权署其国事焉」。ジュリオ・アレーニ（艾儒略）著『職方外紀』、1623年。商務印書館、中華民国二十五年十二月初版による。

詞」及「黑崑崙」，蓋即此種。某家買一黑奴，配以粵婢，生子矣，或戲之曰：「爾黑鬼，生兒當黑。今兒白，非爾生也。」黑奴果疑，以刀斫兒脛死，而脛骨乃純黑，於是大慟。始知骨屬父，而肌肉則母體也。又有紅夷一種，面白而眉髮皆赤，故謂之「紅毛夷」，其國乃荷蘭云。香山縣之澳門，久為番夷所據，我朝設一同知鎮之。諸番家於澳，而以船販海為業。女工最精，然不肯出嫁人，惟許作贅婿。香山人類能番語，有貪其利者，往往入贅焉。

和訳：広東は海外の諸蕃が集まる地である。白い蕃人と黒い蕃人がおり、広東の人々は彼らを「白鬼子」「黒鬼子」と呼ぶ。白い方は顔が少し赤く眉や髪が真っ白で、少年でも霜や雪のように白い。黒い方は眉や髪が黒く、顔も黒いが、眉や髪よりは少し薄く、淡い墨色のようである。白人が主人で黒人が奴隸であり、生まれながらにして貴賤が分かれている。黒人奴隸は性質が最も誠実で、しかも力が強く、水中に潜って物を取ることができる。主人が海に潜るよう命じれば、蛟龍や蛇も恐れない。いにしえの「摩訶」や「黒崑崙」とは、おそらくこの種族のことを指すのであろう。ある家が黒人奴隸を買い、広東の女中を妻として与えたところ、子供が生まれた。ある人が冗談で「お前は黒鬼だから、子供も黒いはずだ。今この子は白いから、お前の子ではないだろう」と言った。黒人奴隸は疑い、刀で子供の脛を斬りつけて殺したところ、脛の骨は真っ黒であったので、大いに悲しんだ。骨は父親に、肉は母親に似ることを知ったのである。また紅夷という種族もあり、顔は白いが眉や髪が赤いため「紅毛夷」と呼ばれ、その国はオランダであるという。香山県の澳門（マカオ）は昔から蕃夷が借り住まいしており、我が朝では同知を置いて統治させている。諸蕃は澳門に家を構え、船で海上貿易を生業としている。彼らの女性は手工業に非常に長けているが、嫁に行くことを好まず、婿入りだけを許す。香山県の人は多く蕃語を話せ、その利益を貪る者がしばしば婿入りするのである。²

趙翼は「野史（非正史的な史書）」を好まない態度を貫いたが、完全に排斥したわけではなく、上に引用している著作『檐曝雜記』は筆記隨札に属し、「開明的な野史観を示しており、このような野史撰述の実践は、野史筆記が彼の史学生態において重要な一環をなしていることを表している」³と評価される。広東省における黒骨の混血児事件の記述についても、野史的色彩が濃厚であり、生理学的観点から見ても、奇病を除いて骨が黒色化する人間の存在は確認されていない、実際の出来事とみなすことは困難である。『太平廣記』（李昉により北宋977年-984年に成立した類書）

² 趙翼、姚元之：『清代史料筆記叢刊 檻曝雜記、竹叶亭雜記』中華書局1982

³ 「趙翼不僅沒有那么決絕地摒棄野史，還撰有野史筆記的性質的著作《檐曝雜記》，表現出開明的野史觀，其野史撰述實踐表明野史筆記也是其史学生態的重要一環。《檐曝雜記》屬於筆記隨札，六卷，統一卷，共列142條目，凡六万余言。」单磊. 野史撰述的實踐：趙翼《檐曝雜記》的史學價值. 『地域文化研究』, 2019, (06) :79-95+149.

の「報応三十二殺生」「徐可範」篇では、生き物を残忍に殺して食すことを嗜好する徐可範は、因果応報で病に伏し、ついに命尽きるとき、ただ一束の黒き骨となったという奇談を記している⁴。同じく『太平広記』の「蒼鹿」篇では、千年を生きた鹿の骨が黒くなり、その肉を食した人の寿命は二千年まで延びるとの記述も確認できる。このように生きている、または死したばかりの生物が黒い骨を持つことに関する記述例は散見されるものの、その多くは伝奇・奇談の叙述にとどまっており、定型的なモチーフとして広く用いられるには至っていないなく、この視点から見ても、趙翼は黒骨の混血児事件を実際にあった出来事を如実に記したとは考え難い。しかし、樋泉克夫氏によると、広東や香港、さらに南中国一帯では、清の時代まで一般的に行なわれていたと考えられる「骨占い」の風習が存在し、これが趙翼の記述に表現上の参照源を提供した可能性がある。葬式を行う際に、茶の葉の入った紙袋を遺体と棺桶の隙間にぎっしり積み、それが防腐剤・乾燥剤の機能を果たす。時間の経過とともに肉の部分は腐敗し、骨だけが残る時に、子孫が棺桶を掘り出して茶葉の作用で骨の変色具合を確認する。黄色く変色したら、子孫が金持ちになると信じられ、その次は無難な白色で、骨が黒くなったら一番縁起が悪いとされる。これが骨占いである⁵。

杜撰であるにせよ、誇張であるにせよ、あるいは当時の風習を踏まえた改編であるにせよ、趙翼のこの記述はすでに種族間婚姻（黒人奴隸と広東女中）、および混血児とその遺伝の規則性（骨格は父に、肉体は母に似る）について言及していた。「骨は父親に、肉は母親に似る」は遺伝に対する誤解釈である。現代の遺伝学とは異なり、身体の部位ごとに父母の特徴が分かれて現れるという形質分離の素朴な理解が見られ、当時の清朝社会で「民族」や「身分」がいかに身体と結びつけて理解されていたかを示す貴重な記録である。もとより、中国の古代宗教やシャーマニズム的信仰の中では、骨を精霊の宿る場所とみなす見方があり、これは骨占いなどの習慣と関連しており、骨に父方の先祖の魂が宿っていると信じられている。こうして「漢民族にとって骨とは、たんに肉体を支える構造上の機能を超え、中華民族そのものを意味していることになる（中略）だから骨こそが中華民族」⁶と樋泉氏が指摘したように、混血の子供は黒い骨をもつことは、すなわち人体の中核、不变の本質を象徴するものが父より継承することを意味する。このような考え方は中国古来の父側をもって家系の源流と考える伝統と一致している。

再び『新野叟曝言』に戻ると、陸士謗が「欧産」という表現を創り出すことで、母側に帰属する血縁・身体的な特異性を顕在化することに成功した。こうして、ポルトガル人の母を持つ文祿は、純血な漢民族と外形上の相違があるか否かについては明文化しないものの、彼が異種族の遺伝特徴を身体的に継承するがゆえに、純粹漢民族とは部分的に異なる「他者」であることを示し、それによって本作品の読者層、特に伝統的観念、価値観や清末期特有の社会文化観や民族意識を共有する

⁴ 李昉：『太平広記（全四冊）』，中華書局，2020年3月北京第1版

⁵ 樋泉克夫：『「死体」が語る中国文化』，新潮社，2008年6月発行，p57-59

⁶ 樋泉克夫：『「死体」が語る中国文化』，新潮社，2008年6月発行，p60

知識人集団においては、成員間で暗黙の民族規範が形成され、それに基づいての自律的に理解が可能となる。一方、文祔の父・文施は漢民族である上に、純粋な儒家教養の元で育てられた伝統式な知識人であるため、文祔は身体上では「他者」という身分を持たされながらも、文化的な「自我」を有する存在となる。

「続」ではなく「新」へ——文祔と語りの転回

清朝最後の十数年、小説という文学ジャンルがめざましい発展を成し遂げた。その波に乗り、『南方報』で連載された呉趼人の『新石頭記』(1904-1905)の反響のもとで、タイトルに「新」や「続」を付けた翻新小説が次々と上梓される。内容は古典作品を現代的なテーマに書き直すものが多く、従来の物語を「反転」させたり、社会風刺を加えたりする傾向がみられる。呉澤泉氏⁷はそのパターンを三つに分け、そのうち『新野叟曝言』をはじめとする陸士諤の翻新小説作品群は、二番目の「古典小説の人物をもとのままの時代に身を置かせながら、周囲の環境に対して現代化する処理を施し、高度に現代化された古代世界を舞台に新たな物語を展開する」に属するものが多いと指摘している。

以下、冒頭部分の分析をもって、本作品の特徴を探り出してゆこう。貴重な時間を読書と科挙に費やしたが才能が認められず、とうとう貧困と無念に苦しむ中晩年を過ごすことになる——『新野叟曝言』第一回開巻詩はこのような儒生の悲惨な運命を嘆きつくしている。

両字の書生最も憐れむ可し、儒冠誤て尽く恨み綿綿たり。
徒に冀北の空羣を冀て想い、竟に長門の賦を売る錢を俟つ。
有用の居諸往日を抛ち、無窮の辛苦中年を歴る。
悶え來り劍に倚り還た長嘯し、卷を把り踟蹰して天に叩かんと欲す。

自らの衣食住もままならぬ書生の陳腐で理想論にすぎないお題目だけでは、現実生活における道徳実践は困難であり、実際の政治にも極めて無力であることを、陸士諤は第一回の冒頭ではっきりと批判の啖呵を切る。このような考えに基づき、『新野叟曝言』は清末の「実業救国」論に踏まえ、新式知識人並びに医療専門職の従業者によって企図された小説であり、その展開は、前書（『野叟曝言』）を補う「実用的続編」として位置づけられる。小説第一回は『野叟曝言』最終回の鎮国府元旦祝賀後の展開を継承し、人口過剰と民生困窮の問題が表になる場面から始まる。地方官と文素臣は道徳勧告による解決を試みるも効果が得られないであるが、ここで李友琴（陸士諤の妻）による「素臣に解決策があれば、士諤先生は『新野叟曝言』を執筆する必要がなくなる」という批注は特に注目に値する。言い換えれば、本書は清末に深刻化した社会状況に対し、その打開策を探る

⁷ 呉澤泉：『曖昧的現代性追求：晚清翻新小説研究』中国社会科学出版社 2016-10-01

とともに、その過程を記録し公に出すことを目的とした。そのような意図は李氏の批注からうかがえる。

第一回の最後は文祿の登場を予告する報知をもって幕を閉じるが、この時点では依然として『野叟曝言』の続編的性質を保持している。しかし文祿の登場を境とする第二回では、作風が顕著に転換したといえる。以下、第二回において文祿が施した改革策を引用し、まとめてみた。

第二回 千古の興亡は片言に解決す 兆民の顛沛は十子の辛勤にあり

①文祿言う：「我々は今日まず一会を設立すべきである。この会は「拯庶会（庶民救済会）」と名付けよう。志を同じくする者は誰でも入会を許す。これによって衆知を集め（集思広益）、効果を上げやすくする。諸君の意見はどうか？」

②洪維、袁緒らは皆賛成した。そこで文祿が草案を作成し、数条の章程を起草。一同で検討した後、幾字かを修正し、宣紙に清書して掲示した。

袁緒発言：

「会を設立した以上、章程に従い会長・副会長・庶務員・書記員・会計員などの役職を選出すべきで、これぞ体制というものだ」

.....

③秘密投票により選挙を実施。まず会長、次いで副会長、その後各職員を選出した。

.....

洪維提言：「調査は確かに必要だが、調査完了を待ってから救済を議論するのでは遅すぎはないか？ 我々は調査員を派遣すると同時に救済準備も進め、両者を並行させるのが良策だろう。救済そのものは必須だが、手法の適否を知るために調査が必要なのだ」

④「救済の方法は新事業の興起に尽きる。新事業とは農業と工業の二つである。土地が広ければ農業を、人口が密集すれば工業を推奨すべきだ」

⑤「農学と工学はいずれも実践的な改良と進歩が求められる。その進歩と改良には、何を廃し何を興すかを事前に研究せねばならず、これには格致（自然科学）の力が不可欠だ。しか

し格致の成果など、一朝一夕に得られるものだろうか？」⁸

上述①から⑤の例が示したように、過庶（人口過剰）と需給不均衡という経済問題を直截に指摘した上で、救庶会の設立、章程の起草、匿名選挙の実施、新事業の創出、格致の発展など、近代的な社会改革プロセスが描かれる。

このような描写は単に物語の進行上の工夫ではなく、清末知識人の改革論争を小説という媒体に移し替えたものと解釈できる。とりわけ匿名投票や役職選挙の描写は、儒家的秩序に依拠する伝統小説には見られない「制度への信頼」を表しており、同時代の立憲運動や実業救国論の文脈に直結している。また、救済策として農工の振興と格致の進歩を重視する点は、時代を少し遡って張之洞らによる実業振興策や科学啓蒙思想の影響を色濃く反映している。こうした要素を取り込むことで、本作は単なる娯楽的続編から、社会改革の理念を提示する近代啓蒙小説へと転化したといえる。以後、文祿の視点から始まる過庶問題への事業・格致による取り組みが物語の本筋に切り替わる。

この「続」から「新」への語りの転回において、文祿がキーパーソンを務めることはいうまでもない。

主人公文祿と混血の身分

前述の通り、文祿は中国人と異域（ポルトガル）人の間に生まれた混血という出自を持っている。管見の限り、混血児が物語の主人公として登場する事例は、古典小説から近代新小説に至るまで極めて稀である。この特異性に鑑み、本節では主人公の混血という身分が物語上必要であった理由と、その文学的、時代的意義について考察する。

まず、文祿はそもそも近代の啓蒙小説、科学小説の主人公を務めるに足るの素質をもっている。彼は才氣煥発な若輩として期待され、とりわけ鎮国府の実際的な権力中心である水夫人に気に入られる描写は、『野叟曝言』からすでに複数の場面で認められる。例えば第一百五十一回において、「私は施郎の嫡長たる玄孫を愛していたが、彼を一度失いながら再び元に帰ってくれた。彼の妻は九万

⁸ 原文は以下になる。「第二回 千古興亡片言解決 兆民顛沛十子辛勤

文祿道：“我們今日當先設立一會，此會就可叫作拯庶會。不論何人，志願同者，皆可入會。庶幾集思廣益，易於見效。衆位以為若何？”洪維、袁緒等盡皆贊成。於是文祿起草擬了幾條章程，經大眾斟酌一番，略改了幾個字，把宣紙謄清，張貼出來。袁緒道：“我們既然立了會，須照章選舉會長、副會長、庶務員、書記員、會計員等各職，方合體制。”……

於是用密選法投票選舉。先選會長，次選副會長，次選職員。……

……洪維道：“調查果係要舉，然俟調查完畢方議施救，不恐太遲麼？我意一面派員調查形，一面籌備拯救事宜，雙方並舉之為妙。蓋拯救總要拯救的，不過措施之法不同，所以要調查耳。拯救之道不外興起新事業，新事業又不外農、工兩項。地曠者宜農，人稠者宜工。農、工兩學，皆須切實改良，力求進步。而欲進步與改良，皆須預行研究何者宜革，何者宜興，是皆不能不藉格致之功。格致之功，豈旦夕所能竟乎？”陸士謄：『新野叟曝言』第二回，李廣益主編，『中国科幻文学大系·晚清卷』創作二集，重慶大學出版社，2020/10

里の外、古来より往来のない国からの生まれである。祩郎はまた我が嫡長たる祩孫であるため、特に命令を出して、彼を寵愛しようとしたのだ（我愛施郎嫡長玄孫、失而復得、他妻子来自九万里外、自古不通之国、祩郎又是我嫡長祩孫、故特命以寵之）と、出自が特殊なため水夫人から親しまれる。家族に勝る才能と一家の長からの寵愛を重ね持つことで、文祩が問題の打開策を探り当てるストーリーが自然に成立し、彼の手にかかれば何事もうまく運ぶことになる。文祩が主人公になる土台は、『野叟曝言』においてすでに築き上げられている。

また、数多くの登場人物から文祩を主人公に選んだ理由は、作者の著作意図とも関わっている。陸士謗の「富民なくして教化・仁義は不可能」と繰り返し説く姿勢は、彼の翻新小説作品群によく見られる。同時に、「夏先生（夏敬渠のことを指す）の大言炎炎たるも、結局は書生の故見を脱せず、これを実事に行わば、必ずや甚だ功效あらんこと無からん（夏先生大言炎炎、終不脱書生故見、行諸実事、一定没甚功効）」⁹と書生の理想主義による道徳実践では、彼の掲げる実用主義的アリズムを実行できる見込みがないと断言する。さて、実用主義を前面に押し出して創出された人物像は、新式知識人として「夏先生」の古き知識人たちによる世直し想像を凌駕するものでなければならぬ。そこで、『野叟曝言』の代表的人物と彼らが体現する理想像を、以下の表1に整理した。

表1 『野叟曝言』の代表的人物と理想像

人物・文祩との関係	『野叟曝言』で担ったストーリー	象徴
文素臣 (祖父)	夏敬渠は終生信奉する正統派の程朱理学の集成として、文祩の祖父・文素臣という儒家書生の完璧像を作った ¹⁰ 。彼を中心に展開する儒家的帝国想像は清朝の読書人の知識と想像を絶する。	「理学聖人の治国想像」
文施 (父)	文施は遙かなる異域で夢の中でしか逢えない恋人との邂逅を果たし、最終的に王室の姫を娶ることで、才子佳人の幻想を成し遂げた。	「才子佳人恋愛想像」
景日京 (祖父の旧友)	濠鏡（マカオ）から波而都瓦爾（ポルトガル）、依西把尼亞（スペイン）、意大里亞（イタリア）、熱而瑪尼（ゲルマニア）に至るまでを征服し、欧羅巴（ヨーロッパ、以下国名以外のところすべてヨーロッパと表記する）七十二カ国を儒教の不二法門に帰依させ、国号を「欧羅巴大人文国」と改めることに成功した。景日京が將軍となり、儒教の世界覇業を展開する。	「將軍の西域制覇想像」

⁹ 陸士謗：『新野叟曝言』第一回、李廣益主編、『中国科幻文学大系・晚清卷』創作二集、重庆大学出版社、2020/10

¹⁰ 商偉：小説戯演：『野叟曝言』与万寿慶典和帝国想像 『文学遗产』2017年03期 155-167

夏敬渠は『野叟曝言』において「理学聖人の治国想像」、「才子佳人の恋愛想像」、「將軍の西域制覇想像」といった物語世界を築き上げたが、いずれも陳腐で理想主義にとどまる。陸士謄は実用主義的な『新野叟曝言』の創作にあたって、従来の旧世界觀を象徴する人物像とは対極的な、科学的合理性を体现する新たな人材像を構築する必要性に迫られていた。このようなナラティブ上の要請が、文祔の主人公化を必然化したのである。文祔は中国人と異域人との混血という出自は、それが伝統な儒家知識人の人物像を乗り越えた人物像を創出するに当たって、もっとも便利な属性であったのである。

さらに、物語の叙述上、文祔とポルトガル国王・陽旦との親族関係は、作品中、中欧対立の顯在化に決定的な機能を果たしている。『野叟曝言』後半三十回の宗教戦争は東南アジアを舞台とし、ヨーロッパ征服の経緯は陽旦と景日京の口述でしか言及されていない（＝舞台裏処理）。この処理は執筆当初の夏敬渠の西洋認識に限界があり、西洋の統一や、キリスト教排斥というテーマが、東南アジアの仏教国家を儒教的秩序に組み込むプロセスほど重要な意味を持たなかつたことを示唆している。ところが、清末の政治的文脈においては、西洋は帝国主義ディスクールの主体となり、また清王朝との矛盾が激化する中で、知識人層は様々な救国策を模索するを余儀なくされる。このような時代背景のもとで創作された『新野叟曝言』では、時代と照らし合わせて西洋世界とキリスト教との対立関係が先頭に置かれ、中一欧間の政治的・文化的緊張を描くための叙述の切り口として、文祔の「混血」という混合的なアイデンティティが重要な役割を担うこととなつたのは、必然的な展開であったと考えられる。

『野叟曝言』物語の結末、『新野叟曝言』物語の土台は、アジア、ヨーロッパを覆う儒教世界の創成である。ところが、儒教強制布教と専制的統治が現地（ヨーロッパ）の自由・平等の価値観と相容れず、民族意識の強いヨーロッパ人が「光復会」を結成して動乱運動を広げたことに端を発する。現地の支配者たちが事態を軽視した結果、ヨーロッパ全土に広まる大規模蜂起へと発展した。第五回からヨーロッパ動乱の伏線はすでに埋められ、第十三、十四回が動乱収束を描写した中心になる。

第十三回 「游飛艦長卿驚奇 征歐洲文祔拜帥」

皇上説：‘欧洲是卿旧游之所，卿之外祖曾來華朝貢過。卿苟能一舉蕩平，可卽宣朕威德，勅封卿外祖陽旦爲全歐盟長，節制七十二邦，不必留兵設官。此朕以夷治夷之策也。’

第十三回 「飛艦に遊び長卿奇に驚く 歐洲を征し文祔帥を挙す」

皇帝の詔曰く：「歐洲は卿が旧游の地であり、卿の外祖父（陽旦）もかつて朝貢に来たことがある。卿もし一舉に平定できれば、朕の威徳を宣べ、卿の外祖父・陽旦を全歐盟長に封じ、七十二邦を節制させよう。兵を留め官吏を設ける必要はない。これぞ朕の『夷をもって夷を治む』の策である」

第十四回「伝檄定歐洲將威武 片言摧俗論名士風流」

一會子又報：“波而都瓦爾國王陽旦首先降了中國，各處基督教堂又都改了孔子廟矣。各學堂課本，歐文尽数都廢去，悉以漢文講授。”又報：“耶路撒冷聖地，被中國兵用淡養甘油炸掉。現在歐洲七十二國，都因懼怕淡養甘油利害，不敢抗拒，都已歸降了中國。中國命波而都瓦爾國王做了歐洲盟長。

……

那時七十二邦，都知波而都瓦爾國王是征歐大元帥的外祖，都鑿其向大元帥說，願歸降中國，遵聽約束。文祔遂與之訂立條約，七十二邦尽数皆遵命簽字。

第十四回「檄を伝え歐洲を定む 將軍の威武 片言に俗論を摧く 名士の風流」

ほどなく次の報告が届く：「ポルトガル国王・陽旦が率先して中国に降伏し、各地のキリスト教会は全て孔子廟に改められた。全ての学校では欧州語の教科書が廃止され、中国文による教育が行われている」。さらに続報：「エルサレムの聖地は中国軍の『淡養甘油（ニトログリセリン）』で爆破された。歐洲七十二カ国はその威力を恐れ、抵抗できずに降伏した。中国はポルトガル国王を歐洲盟長に任命した」

……

当時七十二邦は、ポルトガル国王が征歐大元帥（文祔）の外祖父であることを知り、こぞつて彼を通じて降伏を申し出た。文祔はこれと条約を締結し、七十二邦は全てこれに従って調印した。¹¹

ヨーロッパ動乱の平定において、文祔の化学武器発明が威嚇的な大いなる作用を果たした。しかし一方、彼の外祖父陽旦が率先して清王朝に降伏したことの影響も大きい。この後、他の国も動揺を隠しきれず、ポルトガルを仲介に屈服の意を表す。一旦ヨーロッパを征服した中国は植民地言語の主体でありながら、「中国—欧州」の政治ディスクールにおける対立関係を「文祔—陽旦」という親族関係に凝縮することで、反発の植民地的「他者」を自分の内在に取り組むことに成功した。文祔の混血身分は、化学兵器による武力制圧、及び植民地帝国の確立を合理化させ、東西文明の交錯・再編、そして新秩序の誕生を象徴している。

最後に、文祔の母側の親族のもつ異文化背景は、彼の知識、世界認識と価値観にハイブリディティを付与したことも指摘しておきたい。清末民初の香港・マカオに生息する中国人とポルトガル人の間に生まれた混血児の生活実態について、劉梓琳氏の調査結果によると「香港、マカオ両地域の

¹¹ 陸士謄：『新野叟曝言』第十三回、十四回、李廣益主編、『中国科幻文学大系・晚清卷』創作二集、重庆大学出版社、2020/10

欧亜混血（ヨーロッパ、アジア混血）集団は、清末から民国初年にかけて、ヨーロッパ移民と華人社会の双方から二重の排斥を受けた時期があった。しかしその「仲介者」としての役割ゆえに、時代の転換期にあって比較的豊かな経済資源や多様な人的ネットワークを蓄積することができた。彼らは「ヨーロッパ社会」に溶け込めなかった一方で、「ヨーロッパ」と「中国」（さらには「海上シルクロード」沿線地域全体）との双方に関わりを持ち、独自の共同体を形成しつつ、両側の資源を利用して港澳地域で長期間にわたり社会的優位を保った¹²となる。こうして、華夷秩序の中間的位置に身を狭まれる混血は、逆説的に、儒教的倫理観と西洋の秩序、易学の宇宙観と近代的格致の間に立ち、偏らずにより正確的、全面的な取捨選択ができる。また、種族観念を超え、人類範疇の共通点から物事を見渡す視野も獲得することが可能になる。

例えば、中一欧の社会格差は「中国人の性分は事なき主義、外国人の性分ははからさわぎ（中国人生性是怕事的、外国人生性是多事的）」に由来するという意見に対し、文祿は國の別によらず、すべて「過庶問題」に帰結するなど、やはり俯瞰的な視野を持っている。

ヨーロッパ動乱を平定した後、世界の「過庶問題」の解決に取り組むため、文祿は外宇宙へと開拓の矛先を転じる。最終的に、開拓宇宙船は木星にたどり着き、大同世界の実験場の試作にも成功した。混血児というアイデンティティ、及びその身分の特殊性がもたらす俯瞰的な視野が、外宇宙開拓事業を通して「普遍文明」を創出しようとするまで至るのである。

このようにして、『新野叟曝言』は「中国の大同」を「西洋の近代」を超克する新たな未来想像として提示することに成功した。その成功に至る重要な契機は「中西混淆」の理念を体現した飛空艇の設計にあり、さらに言えば、この飛空艇は「中西混血」という身分をもつ文祿の存在とも密接に結びついて考える必要がある。

「中西混淆」の理念で動かす飛空艇

第十一回では、文祿が飛空艇の制作を命令する際に、伝統的な易学の象徴数値で西洋技術を包装し、ヨーロッパの技術をはるかに凌駕する「儒教的未来兵器」の夢想を立ち上げる。

金演道：“飛艦約造幾何長短，幾何闊狹，打過底稿麼？”文祿道：“此艦欲通行到他星球，小了是不行的。（是極是極。）我想造他個三百六十六尺長，合周天三百六十六度之數。中間広五十尺，合金木水火土五行之數。首尾以次漸狹，狹至銳末，只有二尺四寸的闊，以合一年二十四節氣。其外狀略如橄欖，以便游行無礙，進退自如。艦中共隔作二十四室，也所以象二十四節氣也。艦外帆翼，大小八扇，以象八卦。製造空氣室前後各一，共二室，所以製造空氣者，

¹² 劉梓琳：「訪客、家族与歴史記憶：澳門穆斯林与“海上絲綢之路”关系研究」劉迎勝編，『中西元史』第3輯，商務印書館，2024. 02, p 353

以象両儀。電機室一間，所以司進退者，以象太極。貨倉四間，所以藏貨物者，以象四象。書房三間，為便閱看書籍者，以象三才。辦事室七間，臥室七間，所以便動作休息者，以象七政。此二十四間，除電機室外，每間均備有紙砲二尊，以備不虞。船身用堅木爲之，內裏以鐵皮，外裏以象皮。如此則小有碰撞，不致大損也。蓋象皮係樹膠熬成，性紗而耐久，入水不濡，遇石不懼。”金演道：“這樣大的船能自由飛行乎？”文祿道：“古人說鵬程萬里，那鵬鳥身子，何等龐大，不聞有碍萬里之行。況吾艦能自發空氣，不藉地球力乎？”於是文祿画了一張總圖，又画了幾張分圖，注明尺寸，送交各處工芸場，叫各場工師按圖製造，厘毫不得相差。估明價值，先領一半銀子，以便購料。木匠、鐵匠、成衣匠、漆匠、竹匠，画皆忙碌異常，画夜赶造。

和訳：金演が問う：

「この飛艦の長さと幅の設計図はできているのか？」

文祿答える：

「他星球まで航行する艦では、小さすぎて駄目だ。（その通りだ）私は周天の三百六十六度に合わせ、三百六十六尺（約122m）の長さとしたい。中央部の幅は五十尺（約16.7m）で五行の数に符合させ、艦首艦尾は先細りで最尖端は二尺四寸（約80cm）とし、二十四節氣を象徴する。外観は橄欖（オリーブ）型で、移動の自由度を確保する」

「艦内は二十四室に区画（二十四節氣の表現）。外部には八枚の帆翼（八卦の象徴）。前後に二つの空気製造室（両儀=陰陽）、一つの電機室（太極）、四つの貨倉（四象=太陽・太陰・少陽・少陰）、三つの書斎（三才=天・地・人）、七つの事務室と寝室（七政=日月+五星）を配置する」

「電機室を除く各室に紙砲二門を備え、艦体は堅木に鉄皮を内張り、象皮（ゴム）を外装とする。象皮は樹脂製で耐久性に優れ、防水・耐衝撃性がある」

金演疑う：

「これほどの巨艦が自在に飛行できるのか？」

文祿反論：

「古人が鵬程万里と言ったように、鵬鳥の巨体も飛行を妨げなかった。ましてや我が艦は地球の引力を超越する空気自生装置を有する」

文祿は総図と分解図を描き、寸法を明記して各工芸廠に送付。工匠らは昼夜を分かたず製造に従事した。¹³

¹³ 和訳に一部省略あり。陸士謄：『新野叟曝言』第十一回，李廣益主編，『中国科幻文学大系·晚清卷』創作二集，重庆大学出版社，2020/10

引用が示すように、この回で描かれる飛空艇は、単なる空想科学機械ではなく、「大同世界」創出のための象徴的な器物として設計されている。設計図の寸法や構造は、三百六十六尺=三百六十六度、二十四室=二十四節氣、八枚の帆翼=八卦、二つの空気室=陰陽、一つの電機室=太極、四貨倉=四象、三書斎=三才、七事務室=七政、というように、徹底して易学的・数理象徴によって組み立てられている。『新野叟曝言』の成立より少し前に、『海底旅行』（ジュール・ベルヌの『海底二万里』、梁啓超により訳出され、1902年の『新小説』初刊に掲載）の訳出と紹介に伴ってジュール・ベルヌ風の科学小説が一世を風靡し、その精巧な機械構造に対する説明や、物理原理重視の創作思考が、清末の一部科学小説に多くの影響を与えたといえよう。この回においても、機械構造への説明に対する努力を感じ取れる。ところが、設計図をイメージする際に、飛空艇の物理的機能に重心を置くのではなく、その存在自体が宇宙秩序の縮図として構想されているのである。換言すれば、文神性にとって、易学的な数理象徴は飛空艇を説明する科学的原理の位置を占めていた。この思考は、必然的に「実用的統編」を目的として本作を執筆した作者たる陸士謄とも共有している。

『易經』は思想や教訓の書物であるが、「科学の原理」を説明する書物でもあると主張した人物が存在する。1930年にヴィルヘルムの追悼集会の席で、ユングは「共時性（シンクロニシティ）」の視点から易の基本的な考え方について説いていた。湯浅泰雄氏は『身体の宇宙性』において、中国人のような高い精神性をもった民族がなぜ科学を作り出さなかったのかという質問に対してのユングの発言を以下のように和訳している：

「そう見えるのはあなたの錯覚にちがいありません。中国人は<科学>を所有しています。その科学の“基準”となる<古典>がまさに『易經』なのです。しかしその科学の原理は、中国における多くの事柄と同じように、われわれ（西洋）の科学的原理とまったくちがつていたものなのです。」¹⁴

さらに解釈すれば、西洋の科学史の基本的思考形式は因果性であり、常に現象に対して原因を、効用に対して原理をという脈を踏まえ、因果関係を問い合わせる。それと対比的な面にあるのがここでユングのいう共時性である。「空間的にへだたった二つ以上のものの間に感應による同調現象をひき起こすようなく作用の場>が存在し（中略）古代中国人は、そこには一種のみえないエネルギーが流れではたらいている、と考えた。それが「氣」なのである」¹⁵と湯浅氏は解釈している。

飛空艇の設計図に戻ると、それほど巨大な飛空艇を飛ばさせる方法を問われる際に、文神性の「地球の引力を超越する空気自生装置（があれば問題ない）」という発想から、西洋近代科学から導入された科学万能の信念を読み取れる。他方で、その設計図を支える根本原理は、西洋的な「力学的原理」や「自然法則の数学的記述」ではなく、董仲舒『春秋繁露』に見られるような「人副天数」

¹⁴ 湯浅泰雄：『身体の宇宙性：東洋と西洋』，岩波書店，1994/1, p51

¹⁵ 湯浅泰雄：『身体の宇宙性：東洋と西洋』，岩波書店，1994/1, p52

などの易学的な数理宇宙觀に根ざしている。「人副天数」とは、「人は天数に副う」ということで、「人の首が大きく突出して円いのは、天の姿に象っている。髪は星辰に、耳目は日月に、鼻口の呼吸は風気に、胸中の知的活動は神明に象っている」とある。淮南王國安の『淮南子』には、「頭が丸いのは天に象り、足が方形なのは地に象っている。天には四季・五行・九つの領域（八つの方角と中央）、三百六十日の日数があり、人にもまた四肢・五臓・九つの穴（耳・目・鼻・口と二陰部）・三百六十の節（ツボ）がある」¹⁶と、天数に副うことで、気を経脈に通させ、人体が自由に動けることになる。同様な発想が飛空艇にも適用されている。すなわち、飛空艇は易の数理に従って設計されたゆえ、「氣」のエネルギーが船内を循環する通路が構築されている。氣は宇宙全域を覆うエネルギーであり、飛空艇の寸法、構造や個室の数もまた、数理象徴に基づいて設計されている。その結果、「船は天数に副う」方法により氣の流れが順調に確保され、飛空艇もまた自然に自由な運航が可能となる。

文祿の発想を整理すれば、地球の引力を超越しさえすれば、外宇宙での航行は「氣」に委ねれば十分である。ここで示された解決策は二重の構造を持つ。第一に「引力を超越する空気自生装置」の製造であり、これは西洋技術の範疇に属する（ただし本文では詳細が省略されている）。第二に「船は天数に副う」という宇宙觀であり、これは中国哲学に基づく（本文ではこの側面が詳述されている）。この二重構造には、清末特有の想像力が顕著に表れている。一方には「科学万能」的発想が存在し、他方には伝統的な「氣」の宇宙論が存在する。両者は共時的な科学觀として奇妙に結合し、結果として飛空艇は中国的「象数の宇宙論」を媒介に、西洋近代的「機械宇宙」と接続されている。さらに重要なのは、この結合において「象数の宇宙論」が機械宇宙を包摂する形で世界像を形成している点である。したがって、外見上は「近代科学技術の産物」として描かれていたながら、その内実はむしろ「伝統的世界觀の延長上」にある。この設計理念は、科学技術によって大同世界を実現するという近代的理想的を掲げながら、その根拠を中国的宇宙秩序の再現に置く点で、『新野叟曝言』は科学小説として「中西混淆」の性格を帯びた混淆的様相を示している。

宇宙進出、大同世界創出のために作られた飛空艇が呈するこうした「中西混淆」の様相は、前述の「文祿は身体上では『他者』という身分を持たされながらも、文化的な「自我」を有する存在として主人公に確立された構造ともリンクしている。文祿は中国官僚家族の嫡孫であり、同時にポルトガル国王の孫という出自を持つ。この「中華の正統」と「西洋王権」という二重の身分は肩に持っている。のみならず、思想的な混淆も顕著にみられ、儒教的素養を思想の根源に着けながらも、西洋的自由謳歌、実証主義と実用主義的な価値観もとらえることができる。換言すれば、人格そのものも「中西」の二重性を体現している。こうして、主人公の文祿は「体」＝「複合的な身体」と「混淆した自我」の象徴としてストーリーを主導していく。この構造を飛空艇の設計に重なると、西洋

¹⁶ 湯浅泰雄：『身体の宇宙性：東洋と西洋』、岩波書店、1994/1、p82

近代科学の原理に基づく物理的合理性（地球引力という概念の登場）、及び科学万能思想が確認される一方、易学的・宇宙論的数理象徴を根底にある原理に設定することで、飛空艇は単なる機械ではなく「宇宙秩序の縮図」として設計される。すなわち、飛空艇の「用」は「中西混淆した技術観」であり、技術は単に物理的な道具ではなく、宇宙秩序や大同世界の理想を具現化する媒体ともなっている。

この「混血児＝体の混淆」と「飛空艇＝用の混淆」という二重構造の対応が、物語全体における中西混淆的な表象を可能にしている。『新野叟曝言』が成立した1909年という時点は、時代的にきわめて特異な位置を占めている。作品の背後には「中体西用」論が長らく主流を占めてきた清末の思想状況があるものの、1900年代後半に至ってその論理は既に時代遅れのものとなっていた。戊戌政変（1898）後の政治的挫折や日露戦争（1904-1905）の衝撃を経て、清朝内部の改革派も単純な「中体西用」の論調では現実を説明し得なくなり、その論調がもたらす救国強国の可能性を見切り始めていたのである。

とはいっても、1911年の辛亥革命によって清朝体制が崩壊し、共和制国家が成立した後に見られるような、「全面的に西洋文明を受容しうる」認識へは、当時の中国社会はまだ到達していなかった。したがって1909年前後は、伝統的世界觀を手放しきれず、かつ西洋近代を全面的に信頼することもできない——いわば両者の間に宙吊りにされた時期であったと位置づけられる。

このような歴史的状況のもとで生まれた科学小説『新野叟曝言』は、中体西用の枠組みを単純に踏襲するのではなく、伝統的な「象数・気」の宇宙觀と、西洋近代科学技術への想像力を奇妙に混淆させた表象を提示している。さらに、そのシンボルとして中西混血児である文祔を主人公に引き立てた。『新野叟曝言』まさに1909年という時点の特殊性を体现するテキストであり、陸士謄の未来模索の一記録となっている。

参考文献：

- 夏敬渠 『野叟曝言』 北京匯聚文源文化發展有限公司 2024/12
- 劉迎勝編 『中西元史』 第3輯 商務印書館, 2024.02
- 李廣益主編 『中国科幻文学大系・晚清卷』 創作二集 重慶大学出版社 2020/10
- 李昉 『太平廣記（全四冊）』 中華書局 2020年3月北京第1版
- 商偉 小說戲演：《野叟曝言》与万寿慶典和帝国想像 『文学遺産』 2017年03期 155-167
- 魯迅 『中国小説史略』 訳林出版社 2014/2
- 单磊 野史撰述的实践：趙翼《檐曝雜記》的史学价值 『地域文化研究』 2019, (06) 79-95
- 余三樂 『清代宮中的外国人』 中華書局, 上海古籍出版社 2010/3
- 熊月之 『西學東漸与晚清社会』 中国人民大学出版社 2010/3/1
- 樋泉克夫 『「死体」が語る中国文化』 新潮社, 2008年6月発行

- 張文東 王東著 『浪漫伝統与現実想像 中国現代小説中的传奇叙事』 中国社会科学出版社 2007/9
- 上田信 『海と帝国：明清時代』 講談社 2005/8
- 田若虹『陸士諤小說考証』 上海三連書店 2005/7
- 湯浅泰雄『身体の宇宙性：東洋と西洋』, 岩波書店 1994/1
- 陳平原 『20世紀中国小説史第一卷 一八九七-一九一六』 北京大学出版社 1989/9
- 趙翼、姚元之：『清代史料筆記叢刊 檻曝雜記、竹叶亭雜記』 中華書局 1982
- 坂出祥伸 『大同書』 明徳出版社 1976/11
- 馬歛著 馮承鈞校注《瀛涯勝覽校注》商務印書館 1935；1955 中華書局重版
- ジュリオ・アレーニ（艾儒略）著 『職方外紀』、1623年。（上海河南路）商務印書館、中華民国二十五年十二月初版

付録1 本研究においての「他者」の定義

本論において、文化的・政治的主体「士紳階級とその予備軍としての知識人層」に相対する他者たちと定義し、これらの人物が科学小説の文脈において、科学の応用、科学器具の発明を担うパターンの分析を展開する。

	知識人	対置される〈他者〉像	文化的機能・象徴性	他者像
民族・国民	漢民族、華夏文化の継承者	洋人・混血・少数民族・「化外人」	漢言語文明の「中心／周縁」の問い合わせ	身体上の「他者」
性別	士大夫としての男 士大夫の妻としての女	女子教育の担い手、家庭外で活躍する女性	伝統的ジェンダー秩序の転換	
学問の正統	儒学経典に通じ、科挙を志す	西洋式学校で学ぶ者、西学派	知の正統性が揺らぐ	
統治権	士が正統な政治主体	民間権（結社）・異端的権威（拳民、暴民など）	知の権威の再構築	
言説・表現	古典語・漢詩・八股文	白話、新聞、通俗小説	言語権力の脱中心化	
階級・生活	士大夫・国の政治圈・地元の支配層・職業を選ばぬ（科挙落第生の第二の選択としての）中医	労働者・商人・実業家 新学の教習 西医	士の政治的、経済的特権の低下	文化・政治上の「他者」
外的アイデンティティ	衣冠礼法に厳格 食生活・中食 清潔さがない印象	辯髪廃止・洋装 洋食 整理整頓がなされる印象	儒的身体的記号性の崩壊	
倫理・道徳	家族道徳の中心	個人主義・自由恋愛・家制度否定	儒教的倫理観の再定義	

